



要介護者に特化した 事業モデルからの転換

少子高齢社会の日本では、団塊の世代が75歳を迎える2025年には65歳以上の人口が3657万人と、全人口の3割を占めるといわれています。また、要支援・要介護の認定率は、80歳を過ぎると急速に増加し、90歳を過ぎると6割以上の方が認定されるともいわれています。

多くの高齢者は最期まで自宅で過ごしたいと望まれ、国も在宅療養をサポートする体制に向け、地域包括ケアシステムの構築に力を入れています。しかし、年金や介護保険は財源に限りがあり、国民も自治体も、それぞれができることをしていくしかありません。

介護事業者は、基本的に要介護者を対象とするため、経営の継続性を考えれば当然、介護保険を重視した事業モデルとなり、介護保険制度の影響を受けやすくなります。これが経営上のリスクとして、大きな課題となっています。よって、今までのような要介護者に特化した事業モデルから、少し視点を変えた高齢者の住まいづくりが必要ではないかと考えています。

また、高齢者の視点でみても、多くの方が最期まで住み慣れた自宅で過ごすことを望まれる一方で、やがて本人の意思に関わらず、医療ケアも含めご家族の負担などが増加し、在宅介護の限界がやってくる場合があります。そのときに必要に迫られて、介護サービスを中心とした「住まい」を探すのではなく、その一歩手前のリタイアメント後の段階で住み替えのシーンを想定することも大切ではないでしょうか。

住み替えのタイミングは、①持ち家の老朽化、②家族単位の変化(子どもの独立など)、③通院する病院やショッピングなど、環境や交通の利便性を重視、などがきっかけとなるでしょう。私たちは、より快適な住環境にプラスして、将来必要となる介護体制を備えた新たな住まいのかたちを提供していきます。早い段階で、将来に向けた住まいを自らの意志で選択でき、なるべく要介護にならない仕組み、そして、老老介護や

孤独死、介護離職など介護にまつわる社会問題を根底から支えていくことが可能となる仕組みづくりが大切だと考えています。

今年創設した私たちの新しいブランド「交響MAZERAN」は、健やかでアクティブなライフスタイルを望まれる方々を対象としています。年齢を重ねるごとに心豊かに、自由な暮らしを望まれる方々を、私たちは「ゴールドエイジ」と称します。同じ志向の方が集うことで新たなコミュニティが生まれ、地域や社会との交流ができ、そして趣味やレジャーを通してともに生きる喜びや楽しみを再発見できるでしょう。大切な方との絆を深められるよう、プライベートなお部屋はスイートタイプを中心に設計し、ご夫婦やご兄弟、親子での2人住まいを可能とします。ホスピタリティあふれるコンシェルジュも常駐させ、入居者の身体状況に合わせたクオリティの高いサービスを提供します。また、安心して継続的な医療や介護が受けられるよう、体制を充実させ、「最期まで長く住み続けられる住まい」を実現します。

今秋には第1弾として、神奈川県葉山町の一色海岸通りに、全41室の「交響MAZERAN」を開設する予定です。その後も主要都市を中心に、環境や利便性を重視したエリアに順次建設を進めていきます。

小久保 康史

こくほ・やすし

●PROFILE

平成26年6月株式会社ユニマツ リタイアメント・コミュニティ(旧:株式会社ユニマツそよ風)入社、常務執行役員就任。平成27年6月同社常務取締役兼務開発本部本部長(現任)。

